



シャイフ・ルトウフッラー・モスク
(イスファハーン、イラン)

20世紀イラン文学における 《閉ざされた場所》について

中村 菜穂

1. 2020年のノウルーズを振り返って

鈴木珠里さんから、フォルグ・ファッロフザードとスィーミン・ペフバーニーという二人の女性詩人の生涯と詩作についてお話を伺いながら、改めてイランの20世紀がいかに大きな変転を経てきたのかについて考えておりました。

本日は、はじめに2021年1月時点でのイランの状況をふまえつつ、過去百年ほどの歴史を遡ってイランの文学的な想像力と「祖国」をめぐる思考が互いにどう関係づけられてきたのか、という点に注意を向けてみたいと思います。タイトルの「閉ざされた場所」とは、第一にはコロナ禍での「隔離」にあたる語を念頭に置いています。そこから出発して、ある種の閉塞についての観念が実はイランの現代文学の深層心理、あるいは人々の内面に深く根を下ろしたある心的な状況に関わっているのではないか、という仮説について考察してみようと考えております。

162 まずは一年ほど前のことから話を始めたいと思います。ちょうど、大阪大学の博士課程でイラン近代文学の研究をされている木下実紀さんが、一昨年^{※1}から昨年春にかけてイランに滞在された際の滞在記をアジア・アフリカ言語文化研究所のウェブサイト^{※1}に書いておられますので、参考にしていただければと思います。2019年の末から、アメリカとイランの間の情勢は非常に緊迫しており、2020年1月3日にイラクのバグダード国際空港でイランの革命防衛隊の精鋭にあたるゴドス部隊のソレイマーニー司令官がアメリカ軍によって爆殺される事件がありました。その後の緊張状態の中で、1月8日にはテヘランを離陸したばかりのウクライナの旅客機をイラン空軍が誤って撃墜し、乗客乗員176名が全員死亡するというたいへん悲惨な事故がありました。懸念されていた全面的な武力衝突は回避されたとはいえ、海外のニュースでは経済制裁による人々の苦しい生活状況が伝えられ、また事故の犠牲者を思う市民の怒りと悲しみに満ちた声が聞こえていました。

またこの間、2020年3月末にNHKの記者の方が書いた、イランの現地^{※2}の様子を伝えている記事^{※2}を読みました。イランでは、この年の2月下旬

旬くらいから新型コロナの感染者が出始めたのですが、政府はウイルスをかなり軽視してしまったことで批判を受けていました。ちょうどイランでは3月の下旬、春分の日がノウルーズでイラン太陽暦のお正月にあたります。この時期は日本のお正月と同様、親戚や家族と一緒に過ごす習慣がありますが、一部の人がもう今年は出かけないようにしましょう、と呼びかけて、様々なキャンペーンを行っていました。にもかかわらず、多くの人が渋滞を作って各地に出かけてしまい、結果的に更に感染が拡大してしまいました。そういう状況を見ながら、私も非常に心配していました。同時に、私たちと同様、この未曾有の事態に直面した彼らが、現実をどのような言葉で語っているのか、それを知らなくてはならない、という思いに駆られました。新しい状況の中で、日本でもさまざまな新語というか、新しい言葉が生まれていたと思います。「社会的距離」とか、「密」とかですね。何か社会を変えるような重要な出来事が起こっている際には、それを語る言語が必要となりますし、この状況が言語と文学にどのような変化をもたらすのか、何が現れてくるのかを知りたいと思いました。

2. 隔離（ガランティーネ）とイランの文学

イランの人たちはどのようにこの状況を見ているのか、BBCのペルシア語ニュースを見ていた時に、隔離という意味の「ガランティーネ」という言葉が気になりました。これは辞書を見ますと、普通、検疫とか検疫所という訳語がついています。見ての通り、英語の quarantine とか、フランス語の quarantaine から来ている単語なのですが、ペルシア語での使われ方を見てみますと、もちろん検疫、検疫所の意味でも使われているのですが、一般に隔離状態を指して使われているようでした。この単語がなぜ気になったかといいますと、第一に外来語で、「検疫」という意味をもつ単語であれば、もっとよそよそしい雰囲気が使われていそうな気がするのですが、何やら昔からの知り合いのような、すでにとっても馴染みのある様子で現れていたからです。また、ガランティーネの「ティ」の音を表す字（現在ペルシア語では外来語の t の音に対して ط（ター）の字は使われず、

ハ(テ)の字を用いています)の綴りからしてみても、これは百年くらい前に導入された、古い外来語だということが分かります。

ちょうど日本で「自^{※3}粛」という言葉が広範に使われていたのと似たような感じで、この語は何か社会的な心性に関わっているのではないかと考えました。とはいえ様々な用法のなかでこの語から感じ取られる雰囲気は、日本の「自粛」のように重苦しいものばかりではないようです。一枚、とても気に入ったイラストがありました。イラン



フィールゼ・モザッファリー
「文化的自主隔離」
(BBC Persian, 2012/4/4)

では日々たくさんの風刺画が描かれています。この絵では、「文化的自主隔離(ガランティーネイエ・ファルハンギー)」という表現が使われています。僕は「文化的自主隔離」をするぞ、と真ん中のマスクをして寝転がった人物が自分の周りに本の壁を作って閉じこもっていますね。本好きにはうらやましい図かもしれません。ところで「隔離」と、もし日本語で言えば、あんまりいいイメージでないというか、そこに何か恐怖とか、触れられないもの、といったイメージが付いてくると思います。そのような語が、なぜこんなに浸透しているのか。誤解を恐れずにいえば、好ましい状況ではないものの、そこに何か愛着のようなものさえ窺えるような気がします。

そのようなわけで、この外来語がいつどのようにしてペルシア語世界へやってきたのかを探ってみることにしました。文学から少々離れますが、あらかじめまとめておきますと、この語は、近代医学における防疫に関わって導入されたものであり、イランの政治及び社会生活における近代化の歴史が刻印された言葉だということができます。

3. イランにおける防疫と近代化

他の地域と同様、イランにおいても伝染病は近代の歴史に様々な影響を及ぼしています。20世紀前半の女性詩人パルヴィーン・エエテサーミー^{※4}も34歳の若さで腸チフスのため亡くなっていますし、戦争や飢饉、伝染病の脅威によって死が常に近くにある状態は人々の生活の実感や人生観、そしてそのような時代に書かれた文学作品にも影を落としています。実際に、彼らがどのような社会に生きていたのかを知るのには興味深いことで、文学の理解にも資すると思われまふ。そこで、以下では、文学の専門領域からはやや離れてしまひますが、防疫に関する歴史的過程を概観しつつ、近代のイランに「ガランティーン」の語が取り入れられることになつた背景を探つてみたいと思ひます。^{※5}

見市雅俊さんの『コレラの世界史』という本の中に「中東社会とコレラ」^{※6}という一章があります。この本によると、19世紀のヨーロッパを席捲したコレラという伝染病は、もとはインドの風土病、エンデミックであつたところから、軍隊の進出とともに世界的流行をみたわけですが、そこにイギリスの近代社会の発展と都市の設計、メディアの発達など、いろいろな要素が関わつてきます。著者の指摘のなかで興味深い点として、ヨーロッパと中東地域は、どちらも共通した伝染性の病を経験しているのですが、病気の拡大と収束の仕方が異なつていたことが挙げられます。ヨーロッパでは、著者によれば、時代ごとの伝染病があり、ペストは14世紀くらいから大流行しますが、17世紀にはその脅威から解放されます。けれども、中東地域では、ペストは19世紀中頃まで続いており、時代を問わずさまざまな伝染病が並存している、という状態が続いていたようです。このことは当時のヨーロッパでしばしばイスラーム世界に対する偏見とも結びついて論じられたことが、見市さんの著書に述べられていまふ。^{※7}^{※8}

またもう一つ、公衆衛生や科学的な知見に基づく生活習慣はもちろん、そのような科学的思考もまた近代の産物であつたことを思い起こしておく必要があるかと思ひます（非合理的な要素や迷信など、混沌とした社会の様相について書かれたものも色々ありますが、藤元優子先生がヘダーヤト

の短編「救しを求めて」について書かれた聖地参詣に関するご論考^{※9}がたいへん興味深い内容で、お勧めしたいと思います。

イランの近代化は、19世紀初頭、ガージャール朝のファトフ・アリー・シャーの治世に2度の対ロシア戦争^{※10}があり、そこで敗北したことをきっかけに始まったと言われています。このときにイランの軍を率いた皇太子アッバース・ミールザー^{※11}は、近代的技術や制度の必要を痛感して改革に着手しますが、医学はそのなかでも重要な項目の一つでした。19世紀のイランにはヨーロッパ諸国から医師たちがやってきており、例えばアッバース・ミールザーに仕えたイギリス人医師によって『天然痘撲滅の書』^{※12}といった論文が書かれ、ペルシア語に翻訳されたり、ワクチン接種が部分的に導入されたりしています（改革者アッバース・ミールザーはワクチン接種に積極的だったようですが、社会にはいまだ相当な拒否反応があったようです）。ガージャール朝期の医療に関する記事からは、19世紀前半には天然痘が主な撲滅の対象であったことがわかりますが、19世紀半ば頃からコレラが猛威を振るうようになります^{※13}。先程の見市さんの本によると、中東に関してはまず1820年に、オマーンと抗争中であったイギリスが、ボンベイから軍隊を派遣したことによって、おそらくオマーンに伝播したとあります。1831年にはメッカへの巡礼者たちの間でコレラが発生し、1万2千人もの人が亡くなったと言われています。メッカではその後も十数回にわたって流行が起り、かなり深刻な状況であったことがわかります^{※14}。

当時のイランから見ると、エジプトとイスタンブルが先進地域でした。そのようななかで、ガージャール王族のモハンマド・ホセインという人が19世紀中頃にイスタンブルでフランス語を学びながら、コレラへの対処法を記した『コレラの書』^{※15}という書物を書いたりしています。

防疫に関して転機となったのは、1866年にフランスの主導のもとイスタンブルで開催された国際衛生会議でした。そのときのイランの代表の一人は改革派官僚として有名なミールザー・マルコム・ハーン^{※16}という人物でした。彼は後にロンドンでペルシア語新聞『ガーヌーン（法）』を発行して法治主義を訴え、イランの近代化に重要な足跡を残しています。またこの時に参加したポラック^{※17}というお医者さんは、オーストリア・ハンガリー

帝国の出身でイランに長く滞在して、コレラの研究をしていた人です。

今の状況と似ているところがありますが、感染症の拡大を防ぐためには当然ながら各国の協力が必要となります。この点でイランはインドとヨーロッパ、それからアラブ世界の中間に位置していることから、防疫上、重要な地点とみなされました。そのようなヨーロッパ諸国の後押しを受けて、イランの国内でも、^{※18}検疫に関する審議会が作られました。トロザンというフランス人医師の尽力によって検疫に関する議論がなされ、やがて検疫所が設置されます。

4. 近代的知の体系としての医療用語の導入

再び言語の問題に戻りますと、19世紀の半ばに、テヘランに近代的な技術学校ダーロール・フォヌーンが創設されます。医学はそのなかの重要な分野の一つでした。この学校にはヨーロッパ人の教師たちが招聘され、ヨーロッパの書物が書かれたり、翻訳されたりしていました。この時期の書物に、^{※19}オランダの医師ヨハネス・シュリンメルによるフランス語の著作『フランス語-ペルシア語、医学・薬学・人類学用語』（1874年）があります。一見すると普通の用語集のように見えますが、単に用語辞典というだけではなく、それぞれの語に解説が付されたものでした。つまり、新しい用語を導入する際に、それらにまつわる近代的見方や科学的知見をも説明し、教える必要があったことを意味しています。特にシュリンメルは、1871年にクルディスタンで流行ったペストの研究を行っており、その研究も含まれているそうです。さて、この書物のなかで、^{※20}Quarantaineの見出しのもとに「ガランティーン」の語が出てきます（なおこの時点では、「ガランティーン (قرنطين)」と記されているのですが、後には「ガランティーン (قرنطينه)」と最後に h (ペルシア語で e の音) がつくようになります)。ペルシア語の辞書ではだいたい、アラビア語からの借用語とされていますが、その経路は詳しくわかっていません。^{※21}ともかくもこの時代にこの語がペルシア語に取り入れられていたことが確認できました。そして、繰り返しのようになりますが、このようにヨーロッパにおける近代的語彙と、ペルシア

語の説明を対応させていくことは、単に言葉だけではなく、衛生に関する観念や、イランの人々の思考そのものを近代化するために非常に重要な意義を持っていたと考えられます。

5. 文学的想像力——〈隔離〉の内と外

さてここから隔離（ガランティーネ）という語に限らず、むしろある種の「閉塞」にまつわる観念がどのようにイランの文学的思考のうちに働いていたのかを考えていきたいと思います。その際、主に二つの場合を念頭に置いています。一つは実際に「ガランティーネ」の語が言及され、検疫所としての「ガランティーネ」が作品のなかで描かれる、あるいは「ガランティーネ」という語が暗示的・比喩的な意味であれ作品に用いられる場合。もう一つは、この語彙とは関係なく、何らかの閉ざされた場所や、概念的な閉塞状態が作品のなかで大きな役割を持っている場合です。なぜこのような分類をするかということ、実際の検疫なり検疫所が文学的な想像を呼び起こす場合と、反対に、日常のなかの想像力が先にある、表現の手段として時折、この語を引き寄せている場合が考えられるからですが、文学的表現の可能性はこの具体的な事物とそれらの抽象的な捉え方との間に最も豊かに広がっていると思われれます。

「ガランティーネ」の語がもつ第一の辞書的な意味は、すでに述べたように「検疫」および「検疫所」というものです。国境の外部から入ってくる動植物や人間が伝染病を有していないかを明らかにするために一定期間保管しておく、または待機させる場所という意味で、現在まで使用されています。また、そこから「隔離」の措置、状態、施設をも指すようになったと考えられます。

ここからは推測ですが、当初、つまり19世紀末から20世紀前半にかけて、「ガランティーネ」の語は、一般の人々にとって近寄りがたい、何か恐れを喚起するような場所であったのではないかと想像します。つまり、危険なものを（その危険がなくなるまで）閉じ込めておくための「隔離施設」としての「ガランティーネ」です。その際に、ヨーロッパからの外来

語の響きを持つ魔術的な作用も考慮に入れて良いかもしれません。

ここで二つの対照的な例を取り上げたいと思います。奇しくも同時代を生きた二人の大作家、モハンマドアリー・ジャマールザーデ^{※22}とサーデグ・ヘダーヤト^{※23}です。この二人は20世紀イランに現れた相異なる潮流を代表する存在でもあります。ジャマールザーデは、1921年にペルシア語で最初の短編小説集とされる『昔々』^{※24}を発表し、近代文学の祖と呼ばれた人です。この1921年に、イランでレザー・ハーンによるクーデタが起こり、その後、1925年にパフラヴィー朝が創設されます。この時期に、イランの文学潮流は大きな転換を迎えていたと考えられるのですが、大まかに言いますと、それ以前の立憲革命期^{※25}には、政治・社会的な主題が詩や散文の中心的テーマであったのが、レザー・ハーンの登場後、特にパフラヴィー朝の時代に入ると、表立った政治的主張は抑圧されるか、影を潜めていき、それに代わって抒情的な文学や個人の内面に目を向けようとするものが多く現れるようになります。この傾向はイラン・ロマン主義と呼ばれたりもします。この後者に位置するのがヘダーヤトだといえます。

169

外部の視点

実は、「ガランティーネ」の語が現れる文学作品を調べていた際に、最初に行き当たったのがジャマールザーデの『復活の荒野』^{※26}という作品でした。イスラームにおける「復活」もまた、近代のイランに広範に見られた暗示的主题の一つですが、この作品は最後の審判と天国への旅を題材にした風刺的なフィクションで、主人公が死後の再生を果たし、最後の審判に向かう前段階で「検疫所」を通ります。ここでの「ガランティーネ」は、二つの領域の境界に置かれたある種の「浄化」の装置として、作品の風刺的意図を見事に表しています。また、ジャマールザーデによるこの語の使い方は本来の意味、第一義に忠実です。しかしながら、これとは別にジャマールザーデの描いたもう一つの隔離状態の例として、それ以前に書かれた『精神病院』^{※27}は特に重要性を持っていると思われます。

そもそもジャマールザーデという作家は、お父さんがジャマーロッ

ディーン・ヴァーエズという立憲革命期の有名な説教師でレバノン系であったことから10代はレバノンで勉強し、その後、エジプト経由でフランスに渡り、ヨーロッパを転々として、最後はスイスで執筆を続けた人です。ですから彼の作品に描かれる祖国イランは、彼が子ども時代に経験したイランなのだとよく言われています。ともかく、ジャマルザーデがイランの外にいてペルシア語で小説を書き続けた、という点は強調しておきたいと思います。

ジャマルザーデは1921年にベルリンで『昔々』を発表して注目を集めますが、彼が行った政治・社会風刺がおそらくきっかけとなって、約20年間、作品を発表しませんでした。その後、1940年代から矢継ぎ早に作品を世に出しましたが、その一つが『精神病院』です。原題は「ダーロール・マジャーニン」、直訳すると「狂人たちの家」です（イランではある時期までこの表現が使われていたようです）。この作品では、実際には病気ではないにもかかわらず精神病院に入ることになったある人物の手記を介して、その内部の様子が明かされるわけですが、ここで、作家は患者の一人としてヘダーヤトアリーという人物を登場させています。興味深いことに、この人物のモデルはかの作家サーデグ・ヘダーヤトであると言われています。ジャマルザーデが彼を一人の「狂人」として描いたことの真意については様々なことが言われていますが、作家自身を含めた文学者がまっとうに生きられない社会に対する一つの風刺として、この設定を捉えることができるかもしれません。

『精神病院』という作品で言及しておきたい点の一つは、この「狂気」の問題です。そもそも精神的な不安定さや抑鬱状態、論理の喪失といった事態は、根本的に人間の「場所」に対する感覚と結びついていると考えられます。ですから、この「閉ざされた場所」という主題を考える際に、そこに置かれた人間の精神のあり方が一番の問題となります。それとともに、この場所について語る主体、「語り手」がその内部にいるのか外部にいるのかによって、見方は大きく変わってきます。ジャマルザーデに関して言うならば、彼はイランの政治・社会を風刺する立場から、その「外部」に立っていることは明らかです。それは作家が外国からイランを見ている

という事実にも当てはまりますし、この作品ではあくまで「正常」の側、健常者の視点に立っているという点に、特に際立って表れていると思われ
ます。

その一方で「狂人」の単数形「マジュヌーン」という言葉には、イランでは極めて文学的と言いますか、幅のある意味合いが付されていて、とりわけ神秘主義の文脈では必ずしも否定的でないばかりか、懊悩する人、心から神の道に邁進する神秘主義者の理想的姿としてもしばしば現れてきます。そして、この神秘主義的側面は、イランの実に様々な芸術分野に大なり小なり影響を与えていると思われま
す。その点で、イランで「狂気」は単に排斥されるのではなく、美的な感性とも結びついていることがあり、そのような極限的な精神性を描こうとすることは、むしろ芸術に肉薄しようとする
ことだとさえ言えるかもしれません。

内部の視点

こうした前提のうえで、「閉ざされた場所」の内部を体現するのはヘダーヤトだと言えるでしょう。彼の代表作『^{※29}盲目の梟』の物語は、まさに塙で閉ざされた場所の内部で進行します。様々な作品において、作家の自我を閉じ込めているものは、彼の身体であったり、家や壁であったりしますが、生きることの苦しみから生じる妄想や狂気が、繰り返し描かれています。作品については詳しくは述べませんが、ヘダーヤト作品に見られる鬱屈した生のあり方は、レザー・シャー期の抑圧的な体制や時代の重苦しさとも関わってきます。特に1951年にヘダーヤトがパリで自殺した事件は、イラン社会に大きな衝撃を与えました。個人の出来事でありながら、今もって一つの社会的事件として捉えられています。

このような抒情的なものへの傾斜や内面の深化が見られるようになるのは、明らかに立憲革命期の後の時代とも言えます。先ほど触れたイラン・ロマン主義の傾向はおよそ1920年代以降、1950年代にかけての時代に現れており、詩においても顕著に見られます。とりわけレザー・シャー退位後の1940年代以後に登場した詩人や作家たちに、ヘダーヤトは絶大

な支持を得ました。詩人ナーデル・ナーデルプール^{※30}もヘダーヤトに傾倒した一人ですが、彼を含む同時代の詩人たちの作品には、「囚われ」「狂気」「孤独」といった語やタイトルが共通して見られました。早熟の詩人であるフォルグ・ファッロフザードもまた、こうした時代の詩から出発していて、彼女の初期の詩集の二冊はそれぞれ『囚われ人』『壁』^{※31}と題されていたことが思い出されます。

「自由と祖国」から「自由と解放」へ

先ほど、イランでは1921年から25年までの間に文学の転換期を迎えていたと述べました。立憲革命期とパフラヴィー朝期の文学の違いということになりますが、方向性や主題の点で、なぜこのような違いが生じたのか、その点を少し整理してみたいと思います。

現代の研究者によれば、立憲革命期の主要なテーマは〈自由〉と〈祖国〉であったと言われます。「自由」はペルシア語でアーザーディー(azādi)、「祖国」はヴァタン(ワタン)(vatan/watan)です。ごくおおまかに言いますと、立憲革命期の詩人や文学者たちが目指したのは祖国イランの自立であり、対外的にはイギリス・ロシアの政治・経済的支配を脱すること、また国内の専制主義を打倒して近代的で法に基づく自立的な体制を築くこと、近代的教育の普及などといった現実的な問題に対処することが詩や散文の課題でもありました。ヨーロッパで後に盛んになるアンガジュマン、文学者における政治・社会へのコミットメントは立憲革命文学の特徴だとも言えます。

それに対して、1925年に成立したパフラヴィー朝は、近代主義的な知識人たちの主張を取り入れつつ、西洋化を推し進め、強力な中央集権国家を創り上げます。近代教育の推進や女性たちのヴェールの廃止などはそれ以前から主張されていましたが、この時代にいわば強権的な仕方でも推し進められました。ただし、新しい体制から完全に抜け落ちてしまったのは民主主義の側面でした。愛国主義の称揚、特にイスラーム以前の古代イランの賛美はレザー・シャー期に排他的ナショナリズムやアリア主義^{※32}と結び

ついて喧伝されますが、その一方で言論の自由は奪われ、あらゆる政治活動は抑圧の対象となりました。体制に不信を持つ知識人にとって、もはや「祖国」を理想的主題として語るができなくなった、とひとまずいうことができます。

また、二つの時期では「自由」の概念にも違いがみられます。例えば歴史家のホマー・カートゥーズィヤーンによれば、立憲革命期の政治家であり詩人として有名なモハンマド・タギー・バハール※33において「自由」とは、第一に国家の政治的な自立を意味していたと言われています。それに対して、その後の時代には様々な抑圧からの「解放」がいつそう切実な主題として現れてきます。そこには表現の自由、様々な因習や社会的規範からの個の解放も含まれていました。

スィーミンとフォルグにおける祖国

今回、鈴木珠里さんのお話を伺って、この二人の女性詩人の生き方の違いが改めて鮮明になったように思われます。特に二人の生まれ育った異なる背景は、詩作のあり方の違いにもおおいに影響を与えているようです。

すでに述べてくださったように、スィーミンの父親がイラクで反英運動を行う活動家であったことや、母親も詩人で開明的な一家に育っていたことは、彼女が早くから社会的主題を選び、なおかつ伝統的な詩作に親しむための素地を与えていたと言えます。その点で、彼女は立憲革命詩の正当な継承者の一人と言えるのではないかと思います。イランでは一般的に立憲革命詩と言うと、どうしても現代詩よりも古い、過ぎ去った段階とみなされがちですが、そうではなく、近代に提起された問題や主題を継承し、発展させているところに、この詩人が現代も多くの読者を得ている理由があるような気がします。社会的な主題においては特に民主主義と女性の解放という点で重要ですが、彼女の基盤にある抒情詩という要素が、詩をスローガンに似たものではなく、読者・聴衆の心に深く訴えかけるものになっていると言えます。

一方でフォルグの生まれ育った環境や生き方は、先ほどの「解放」と

いうキーワードに当てはまるような、当時としてまったく新しいものだったと言えます。例えば、この二人より前の、冒頭に言及したもう一人の女性詩人パルヴィーン・エエテサーミーは、レザー・シャー期の女性解放の動きと同時代を生きた人ですが、彼女の時代には女性が詩を書いても、それを認める男性たちはいまだ社会の限られた一部に過ぎませんでした。また、以前、鈴木珠里さんと翻訳したジャーレ（アーラム＝タージ・ガーエムマガーミー^{※35}）という立憲革命期の女性詩人は、力強い言葉で男性を批判し女性を鼓舞する詩を書いているのですが、言うべき言葉を持っていないが、そもそも男性社会で詩を発表することを断念していました。そのような圧倒的な男性中心の社会で、1950年代に現れたフォルグの詩は相当に鮮烈だったと思われる。脚光を浴び、批判や中傷も受けながら時代の寵児になっていくわけですが、彼女の初期の詩集のタイトルでもある「反逆^{※36}」は、彼女の生き方そのものでもあるように思われます。

さて、改めてこの二人における〈祖国〉という主題を考えると、第一に言えるのは、前述のようにパフラヴィー朝期にはこの主題が文学の表舞台から退いていたということです。知識人の多くは社会主義や共産主義に向かっていたし、体制批判は多くの詩人や作家たちに共通しています。ただし、例の古代イラン賛美をどう捉えるべきかについては難しい問題があります。体制の唱導する愛国的イデオロギーを擁護すれば、それは体制を追認することになってしまいますが、かといって否定もできないという心情は多くの人にあったのではないかと思います（このあたりの複雑な点については、藤井守男先生がヘダーヤトのイラン文化認識について書かれているご論考^{※37}があります）。そして、もう一つのイスラームの要素については、パフラヴィー朝はその影響を弱めようとしたましたが、最終的に1979年のイラン革命によって、その反対方向へと転換することになります。宗教やイスラームをめぐる問題も、ナショナリズムとの相克があり、常に看過することのできない問題です。

そのようなわけで、フォルグのナショナリズム批判の詩「ああ、宝溢れる国」（本書39頁参照）は同時代の文脈に沿っているといえますが、その徹底性という点で、非常に興味深いものがあります。まずは「祖国」

を指す「ヴァタン」という語彙それ自体が、立憲革命期の熱狂的な祖国愛を想起させるものですが、この詩では痛烈な皮肉を込めて使われているのがわかります。例えば「愛国主義者」という言葉は、立憲革命期には「祖国を求める人（ヴァタン・ハーフ）」という言い方が一般的でしたが、「祖国崇拜者（ヴァタン・パラスト）」と言うと頑迷な印象さえ与えることになります。「祖国の母（マーメ・ヴァタン）」は祖国を慈愛あふれる母親に喩える、立憲革命期のお決まりのイメージですし、「祖国の男たち」という表現も、やはりその時代の闘争を呼びかけた言葉のなかでありふれたものでした。詩の中でフォルグの批判的な視線は明白に現れています。

また詩のなかの「理想（イデアール）」という言葉の出てくるくんだり、政府の行っていた富くじを指しているということでしたが、立憲革命期の詩人ミールザーデ・エシュギー^{*38}が書いた韻文劇のタイトルとも、何か関わっているかもしれません。参考までに、この作品がどういうものだったかといいますと、1924年に政府が中央集権体制の擁護をもくろんで作文コンテストを開催し、「理想」を主題とした作品を募集したのですが、そのときにエシュギーはこのタイトルのもとに政治批判を行い、その数か月後にやはり体制批判がもととなって暗殺されます。とはいえ、彼のもう一つの作品『イラン諸王の復活』^{*39}は、古代イラン賛美の側面がありますし、一般に彼自身は熱狂的ナショナリストとして捉えられています。

このように読んでいきますと、フォルグが実際に立憲革命の時代をどう見ていたのか、気になるところですが、詩そのものを見る限り、おそらくあまり評価していなかったのではないかと考えられます。それは彼女が先鋭的詩人であったことも理由の一つだと思いますが、そこにやはり批判すべきものを見出していたからだといえそうです。

フォルグにおける〈祖国〉あるいは〈家〉(home/homeland)を考える際に、彼女が徹底的に反抗し、反逆し続けたものは何だったのか。鈴木さんのお話からも、とりわけ「家」はフォルグにとって彼女を閉じ込めてしまうものであり、抑圧の象徴となっていたということがよく分かります。家というものに対して一つも明るい、喜びのイメージがないのですね。彼女にとってはほとんど牢獄と同義だったのではないかとさえ思われます

(この点で映画「^{※40}あの家は黒い」もまた一つの隔離施設を扱ったものですが、内部の人々を共感をこめて映し出しながら、なおもそれが閉ざされた場所なのだということが伝わってきます)。その代わりに、彼女にとって大切な場所が「庭」なのですね。ペルシア語で「バーク(庭園)」あるいは「バークチェ(小庭)」は、それもまた文化的な意味合いがありそうで興味深いです。あるいは路地など、いずれも家の外の空間であることは確かです。そうしてみると彼女にとっての家とは何だったのか。

鈴木さんの紹介して下さったいくつかの詩のなかで、男性たちに対する批判を述べた箇所がありました。彼女がときに辛辣に批判している男性たちは、とにもかくにも愛国者で、祖国を称揚し、過去の栄光に酔い、諸々の権威を振りかざす、そうした存在に見えます。また政治や知識を論じながら、彼女が「庭」に見ているような小さなもの、些細だけれど生きるにおいて必要なものに目を向けることのない人々です。私の周りに知識人と呼べる人はいない、と言い切った彼女の批評の鋭さにも驚かされますが、そのはっきりとした否定の言葉を持って彼女が立ち向かおうとしていたものは何だったのかと考えさせられます。おそらくそれは、イランの家父長主義的な社会そのものであったのではないかと想像します。国家の称揚する愛国的イデオロギーは、軍人であったレザー・シャーとその政権、そこに属していた彼女の父親を通して、またその父に従順な母親の姿を通して詩人の身近に感じられていたかもしれません。ペルシア語の祖国を指す「ミーハン」(mihān)という語彙には、古くは家財や妻子、一族の意味も含まれていましたが、そのような家父長主義的な体制を、「家」は体現するものだったのではないかと思います。

それゆえ、彼女が社会に関心を持たなかったのかということ決してそうではなく、むしろその反対に、祖国や社会に対して徹底して批判的な視点を持ち続けたのだといえるのではないかと思います。そのことは「小さな罪人」について述べた詩「大地の詞」からも伝わってきます。

孤立と分断

フォルグの社会的な詩には、一言で言えば時代の閉塞が映し出されているように思います。人々が皆、己の日々の生活のなかで、何かよりよい生を求めながら、平凡な言い方ですが大切な何かを見失っている状態、空虚さや孤独が、彼女自身だけではなく社会の問題として描き出されているように思われます。こうした社会に鬱積していく孤立や分断は、他の詩人たちの作品にも現れていて、やはりそのような危機感が当時、1960年代にあったのだということがわかります。

このように見てきますと、立憲革命期には〈祖国〉の主題が人々をある意味では団結させたと言えるかもしれませんが、その後の時代には、詩人や作家たちの孤立や社会からの乖離が深まりつつあったといえます。もちろんこれは社会の様々な側面の一つに過ぎないかもしれませんが、社会全体として見た場合に、より大きな枠組みでは「イスラーム主義」と「イラン主義」の葛藤、古代に基盤を求めるナショナリズムと、宗教的な感情や規範の相克のうちにも見られます。とはいえ、文学の観点から最も注目すべきなのは、詩人・作家とその作品の受け手である読者、社会との間にある孤立ではないか、と考えています。

鈴木さんがスィーミンによる「祖国」を詠った詩を紹介していただきましたが、1979年の革命以後、彼女がこれほど重要な役割を果たしたのも、革命や戦争、移住といった政治・社会の激動のなかで、人々の孤立や分断を乗り越える努力が必要とされたということと関わっているかと思えます。スィーミン・ペフバハーニーの詩人としての活動には、まさに人々を再び結び付けようとする積極的な意図が見られますし、祖国に対する呼びかけが、このようにして再び現れていることはとても興味深く思われます。

この社会的変化と同時に、文学研究においても、この20年ほど（私が勉強を始めてからですが）文学史に対する見方がかなり変わってきました。古い詩から新しい詩へ、という一直線の発展的な文学史観は修正を迫られていますし、立憲革命期の再評価も進みました。それとともに、二つ

の時代の断絶が改めて浮き彫りになってきた気がします。

最後に、これまでの話をまとめますと、イランでは1921年から1925年の時代の変化、パフラヴィー朝の成立とともに、「祖国」に対する文学的な取り上げ方が明らかに変化したと言えます。端的には、ガージャール朝末期、立憲革命期の完全に弱体化してしまった体制のもとでは、祖国の主題は現実的に必要とされていましたが、いざ、知識人たちが求めた強力な国家というものが出現した際、それが自由な言論に対する抑圧装置としての姿を現し始めたのです。一方では政治を忌避する傾向が現れ、他方で政治的な運動が抑圧される状況が断続的に続いていきます。彼らが求めた祖国から、締め出されているような、一種の疎外と言ってよいかもしれません。そうであるとする、その後の時代において彼らの求める〈祖国〉とはどのようなものなのだろうかという点が気になります。

その際に、パフラヴィー朝が推し進めた、古代イランを称揚する言語・文化的ナショナリズムと、現在のイスラーム体制の示す宗教的なイデオロギーという、全く異なる価値観を現代のイランが内面に抱え込んでしまっている点が、やはり彼らが祖国をどう捉え直すのかというときに問題になってくるかと思います。

はじめに戻りますと、ここで取り上げた、「ガランティーネ（隔離）」という言葉は、もともと外来語であり、イランの近代化に出自をもっている言葉だということを確認しましたが、いつの間にか、この数十年の歴史のなかで人々の心の中の一つの隔離状態を暗示する、あるいは想起させる言葉になったのではないかと考えています。この点は、また今後勉強を進めながら徐々に明らかにできればと思っております。

以上で終わります。ありがとうございました。

- p.162 ※1 木下実紀、2010/8/21「混乱のイラン——滞在手記——」アジア・アフリカ言語文化研究所Fieldnet 特設サイト「COVID-19とフィールドワーカー」（2020/8/21）<https://fieldnet-sp.aa-ken.jp/277>
- ※2 戸川武、2020/3/27「感染急拡大 イランから退避した記者が見たもの」<https://www3.nhk.or.jp/news/special/new-middle-east/iran-covid-19/>
- p.164 ※3 「自粛」の語から日本社会を観察した例として、以下のような記事がある。アルモーメン・アブドール「「自粛」という言葉の向こうに見える日本人独特のマインド」（Newsweek日本版、2020/6/23）https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2020/06/post-93756_2.php
- p.165 ※4 Parvīn E‘tesāmi, 1907-1941. イラン、タブリーズ生まれ。社会で弱い立場に置かれた人々への共感や慈しみを、伝統的な形式を用い、多く物語風の詩として詠った。
- ※5 イランの防疫に関しては、Afkhāmi, Amir Arsalan, “Health in Persia iii. Qajar period” *Encyclopedia Iranica* (updated 2012) オンライン版を主に参照した。<https://www.iranicaonline.org/articles/health-in-persia-iii, update 2012>
- ※6 見市雅俊、2020、『コレラの世界史』、晶文社、（新装復刊、初版は1994年）。
- ※7 見市2020:28
- ※8 とくに、イスラーム世界で病人を隔離せず、「宿命」を甘受して病人や死者に尽くそうとする人々の姿が目立ったことについて、ヨーロッパの間には否定的な見方があったという。例えば、作家ダニエル・デフォーは『疫病流行記』（1722年）のなかで、トルコ人たちが「予定説をいいことにして〔……〕疫病に感染したところに平気で出入りし、患者と交わった」と非難めいた言葉を述べている（見市2020:30）。病への対応の仕方が、精神的怠惰など当時の非ヨーロッパに対するステレオタイプと重ねられていたことがわかる。
- p.166 ※9 藤元優子、2010、「小説の中の聖地参詣」森茂男編『イランとイスラーム 文化と伝統を知る』、春風社、pp.148-162。
- ※10 イラン・ロシア戦争。カフカス地域の領有をめぐる争われ、いざいざもイランが敗北した。第一次戦争は1804-13年、第二次戦争は1926-28年。イランはロシアとの間にゴレスターン条約、トルコマンチャーイ条約を結び、カフカスの領土を失うとともに多額の賠償金を課せられ、不平等条約により政治・経済的従属を強いられることになる。
- ※11 Abbās Mirzā ガージャール朝第二代君主ファトフ・アリー・シャーの王子（1789-1833）。1799年に皇太子となり、アゼルバイジャン

州総督を務めた。2度の対ロシア戦争を前線で率い、敗北を喫した後、軍事改革を中心とする近代化に着手、イランで初めてヨーロッパに留学生を派遣した。1833年、イラン東部への遠征の途上に病没した。

- ※ 12 *Ta 'līm nāme-ye resāle-ye ābele-kūbī* 1829. イギリス人医師 John Cormick (d.1933) が書いたワクチン接種に関する書物。アッバス・ミールザーの命に応じてMohammad ebn 'Abd al-Sabūrによりペルシア語に訳された (Karimkhān Zand 1391:100)。同書はタブリーズに設立された印刷所で印刷された最初の書籍の一つとなった (Afkhami 2012)。その他、同書に関しては以下を参照。Kamran Ekbal and Lutz Richter-Bernburg, "Cormick, John" *Encyclopedia Iranica* (updated 2011).
- ※ 13 Afkhami 2012.
- ※ 14 見市2020:26
- ※ 15 "Resāle dar vabā" (1845年頃)。Afkhami 2012および以下を参照。Mottaqī, Hoseyn 1384 [2005/6], "Mo'arrefī va naqd-e ketāb: Mo'arrefī-ye barkhī az noskhehā-ye khattī va asnād-e ta'āmolāt-e farhangī va ravābet-e tārikhī-ye do mellat-e Īrān va Farānse," *Tārikh-e ravābet-e khārejī* (24-25) 245-289.
- ※ 16 Mirzā Malkom Khān イランの改革派官僚、文筆家 (1833-1908)。アルメニア系の出身。
- ※ 17 Jakob Eduard Polak, 1818-1891. オーストリア・ハンガリー帝国出身の医師。ボヘミアのモリジナ生まれのユダヤ教徒。1851年から60年にかけて近代学校ダーロール・フォヌーンで医学を教え、1855年から60年にかけてナーセロディーン・シャー (在位1848-1896) の侍医を務めた。
- p.167 ※ 18 Joseph Désiré Tholozan, 1820-1897. フランス領モーリシャス出身の医師。1858年以降30年以上にわたってナーセロディーン・シャーに仕えた。
- ※ 19 Johannes Lodewik Schlimmer, 1818-1876. オランダ出身の医師。イランの近代学校ダーロール・フォヌーンで教鞭を執り、同地における近代医学の発展に尽力した。
- ※ 20 *quarantaine* の語は、もともと「40日間」を指し、1348年、黒死病流行の最中にヴェニスに入港した船舶の乗組員たちに対しただちに上陸することを認めず、40日間上陸を猶予させたことに由来する。検疫問題の権威ミルロイの定義では、「病原体を携行しているのではないかとおぼしきヒトならびにモノを地域社会から切り離し、隔離する」制度とされる (見市2020:43)。
- ※ 21 アラビア語でのこの語の使用について、福田義昭氏よりご教示いただいたところによると、19世紀のエジプト人啓蒙家タフターウ

イーが渡仏した際に、マルセイユ港で「カランティーナ」に入れられた話が旅行記『パリ要約のための黄金の精錬』（1834または35年）に取められているという。実際の旅行の経験やこれらの旅行記などを介してペルシア語にもこの語（および制度）が伝わったことが推測される。

- p.169 ※ 22 Mohammad 'Alī Jamālzāde, 1892-1997. イラン、エスファハーン生まれ。イランにおける小説の第一人者の一人。父親のジャマーロッディーン・ヴァーエズ（1863-1908）は立憲革命期の有名な説教師であった。幼少期にイランを離れ、生涯の大半をヨーロッパで過ごしながらかペルシア語で小説を書き続けた。
- ※ 23 Sādeq Hedāyat, 1903-1951. イラン、テヘランの名門に生まれる。近代学校ダーロル・フォヌーンで教育を受けた後、ベルギー、フランスに留学。カフカの影響を受けつつ、多くの優れた小説を書いたほか、オマル・ハイヤーム『ルバイヤート』の校訂や民俗学研究など多方面で活躍した。1951年、パリで自殺。
- ※ 24 Yekī būd yekī nabūd (1921).
- ※ 25 イラン立憲革命（1905-11）を中心とする時代。19世紀中頃から社会改革を求める動きが起こっていたが、1891年、イギリス人に譲渡されたタバコ利権の破棄を求めたタバコ・ボイコット運動を前段階として、市民による政府への抗議運動およびアダーラト・ハーネ（公正の家）開設の要求が高まり、1906年8月、国王モザッファロッディーン・シャーは立憲樹立の勅令を出した。10月に国民議会が開設されたが、新たな国王となったモハンマド・アリー・シャーにより1908年6月、反革命が起こる。タブリーズを中心に各地の市民による抵抗運動が組織され、1909年7月、立憲制が回復したが、第二次議会では財政改革をめぐってロシア政府の干渉にあい、1911年末に議会は解散を余儀なくされた。
- ※ 26 Sahrā-ye mahshar (1944).
- ※ 27 Dār al-majānīn (1942).
- p.170 ※ 28 ここでは主に、木村敏、2005、『関係としての自己』を参照している。離人症や対人恐怖症、統合失調症などの精神病理を論じた木村は自己と世界、自己と所属集団、自己と自己との「あいだ」の関係性に着目した。
- p.171 ※ 29 Būf-e kūr (1937). 邦訳はサーデク・ヘダーヤト、1983、『盲目の梟』、白水社。
- p.172 ※ 30 Nāder Nāderpūr, 1929-2000. 「詩人の運命 ナーデル・ナーデルプール詩選」『中東現代文学選2012』、pp.202-220. 中村菜穂「異郷のペルシア語詩 ナーデル・ナーデルプールの祖国 (vatan) と異郷 (ghorbat)」、岡真理編、2019、『ワタン（祖国）とは何か：中東現代文学におけるWatan/Homeland表象』京都大学大学院

- 人間・環境学研究科、pp.21-35。
- ※ 31 Asīr (1952), Dīvār (1956).
- ※ 32 近代のヨーロッパでは言語学におけるインド・ヨーロッパ語族の研究から、架空のアーリア人種を想定する説が生み出され、ドイツやイギリスにおいて植民地支配や人種の偏見の「科学的根拠」として主張された。イランでは主要言語であるペルシア語がインド・ヨーロッパ語族の系統に属することから、体制はこの説を利用し、1935年には正式な国の呼称をペルシアから「アーリア人の土地」を意味する「イラン」へと変更した。
- p.173 ※ 33 Homa Katouzian, 2002, “The Poet-Laureate Bahār in the Constitutional Era,” *Journal of the British Institute of Persian Studies* (40), 233-247.
- ※ 34 Mohammad Taqī Bahār, 1886-1951. イラン、マシュハド出身の詩人、政治家、文学者。立憲革命期の著名な詩人の一人。
- p.174 ※ 35 ‘Ālam-tāj Qā’emmaqāmi, 1884-1946. イランの名門出身で、「ジャーレ（露）」と号した。親の意向により16歳で歳の離れた軍人のもとに嫁ぎ、望まぬ結婚への不満や女性の置かれた不利な社会的立場について詩作したが、生前は詩を発表せず、亡くなった後に文学者であった息子の手によって詩集が出版された。近年再評価が進められている。ジャーレ（アーラム＝タージ・ガーエムマガーミー）著、ザフラー・ターヘリー解説、中村菜穂・鈴木珠里訳、2012、『古鏡の沈黙 立憲革命期のあるムスリム女性の叫び』、未知谷。
- ※ 36 ‘Osiyān 1957.
- ※ 37 藤井守男、1990、「サーデク・ヘダーヤト Sadeq Hedayat (1903-51) のイラン文化認識をめぐって」『日本オリエント学会創立30周年記念オリエント学論集』、pp.415-433。
- p.175 ※ 38 Mohammad Rezā Mirzāde ‘Eshqī, 1894-1924. イラン立憲革命期の詩人。イランにおいていち早くロマン主義的な傾向を示した詩人として注目される。
- ※ 39 *Rastākhīz-e shahriyārān-e Īrān*. この作品の概要については以下を参照。中村菜穂、2016、「ミールザーデ・エシュギーにおける政治的ロマン主義の検討 詩劇『イラン諸王の復活』を中心に」『東洋研究』(201)、pp.27-58。
- p.176 ※ 40 p.23参照。

参考文献

英文

Afkhami, Amir Arsalan, 2012, "Health in Persia iii. Qajar period," *Encyclopedia Iranica*.
(updated 2012) <https://www.iranicaonline.org/articles/health-in-persia-iii>

Ebrahimnejad, Hormoz, 2005, "Religion and Medicine in Qajar Iran." Robert Gleave, ed.
Religion and Society in Qajar Iran, London, Routledge.

Ekbal, Kamran and Richter-Bernburg, Lutz, 2011, "Cormick, John," *Encyclopedia Iranica*.
(updated 2011) <https://www.iranicaonline.org/articles/cormick-john>

Katouzian, Homa, 2002, "The Poet-Laureate Bahār in the Constitutional Era," *Journal of the British Institute of Persian Studies* (40), pp.233-247.

ペルシア語

Hedāyat, Sādeq, 1937, "بوف کور Büf-e kūr." 邦訳はサーデク・ヘダーヤト、1983、『盲目
梟』、白水社。

Karīmkhān Zand, Mostafā, 1391 [2012/3]. 'آبله کوبی در ایران: سابقه، روشها، مخالفتها'. *Ābele-kūbī dar Īrān: Sābeqe, raveshhā, mokhālefat-hā*, "تاریخ پزشکی Tārīkh-e Pezeshkī (11)," pp.97-130.

Mottaqī, Hoseyn, 1384 [2005/6], 'معرفی و نقد کتاب: معرفی برخی از نسخه‌های خطی و اسناد تعاملات فرهنگی',
Mo'arrefi va naqd-e ketāb: Mo'arrefi-ye barkhī az noskkehā-ye khattī va asnād-e ta'āmolāt-e farhangī va ravābet-e tārikhī-ye do mellat-e Īrān va Farānse,
"تاریخ روابط خارج Tārīkh-e ravābet-e khārejī (24-25)," pp.245-289.

日本語

アルモーメン・アブドーラ、2020/6/23、「「自粛」という言葉の向こうに見えてく
る日本人独特のマインド」、Newsweek日本版。[https://www.newsweekjapan.jp/
stories/world/2020/06/post-93756_2.php](https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2020/06/post-93756_2.php)

岡真理編、2019、『ワタンとは何か 中東現代文学におけるWatan/Homeland表象』、
京都大学大学院人間・環境学研究科 岡真理研究室。

木下実紀、2020/8/21、「混乱のイラン 滞在手記」、アジア・アフリカ言語文化研
究所Fieldnet 特設サイト「COVID-19とフィールドワーカー」。https://fieldnet-sp.aa-
ken.jp/277

木村敏、2005、『関係としての自己』、みすず書房。

ジャーレ（アーラム＝タージ・ガーエムマガミー）著、ザフラー・ターヘリー解説、
中村菜穂・鈴木珠里訳、2012、『古鏡の沈黙 立憲革命期のあるムスリム女性の
叫び』、株式会社未知谷。

中東現代文学研究会編、2013、『中東現代文学選2012』、京都大学大学院人間・環境
学研究科 岡真理研究室。

戸川武、2020/3/27、「感染急拡大 イランから退避した記者が見たもの」、NHK
NEWS WEB。https://www3.nhk.or.jp/news/special/new-middle-east/iran-covid-19/

185

ナーデル・ナーデルプール作、中村菜穂訳、2013、「詩人の運命 ナーデル・ナーデ
ルプール詩選」、中東現代文学研究会編、2013、pp.202-220。

中村菜穂、2019、「異郷のベルシア語詩 ナーデル・ナーデルプールの祖国 (vatan)
と異郷 (ghorbat)」、岡真理編、2019、pp.21-35。

中村菜穂、2016、「ミールザーデ・エシュギーにおける政治的ロマン主義の検討
詩劇『イラン諸王の復活』を中心に」『東洋研究』(201)、pp.27-58。

藤井守男、1990、「サーデク・ヘダーヤト Sadeq Hedayat (1903-51)のイラン文化認識を
めぐって」『日本オリエント学会創立30周年記念オリエント学論集』、pp.415-433。

藤元優子、2010、「小説の中の聖地参詣」森茂男編『イランとイスラム 文化と伝統
を知る』、春風社、pp.148-162。

見市雅俊、2020、『コレラの世界史』、晶文社（新装復刊、初版は1994年）。

編集スタッフ

編集・制作：渡邊円香

本文デザイン・装丁：松村紗恵〈(株)プラメイク〉

協力：西道奎／中岡ひろみ／呉玲奈〈(株)プラメイク〉

ワタン / Homeland スタディーズ ①

現代イラン文学における Home/Homeland

2022年12月22日発行 初版第1刷発行

編者 岡真理

発行所 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

京都大学大学院 人間・環境学研究科

岡真理研究室気付

電話 075-753-6728

ISBN 978-4-908679-13-1

印刷／製本 (株) コームラ

出版協力 (株) ユニオン・エー

©Mari OKA, 2022 Printed in Japan

本書は、科学研究費基盤研究(A)「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文的、領域横断的研究」(20H00006, 代表：岡真理)の成果の一部として、科研費で作成されました。